


1 作物

項目	作業内容
<p>(1) 麦の調製</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <p>麦 調製作業(入念な調製、赤かび粒・カラスノエンドウ種子混入防止)</p> <p>普通期水稻の田植え 1株3～4本で、坪当たり45～50株植えの疎植栽培</p> <p>早期水稻の管理 山間、中山間部での水管理、溝切り、中干し、いもち病防除</p> <p>大豆の播種 播種適期、湿害対策、種子更新・種子消毒、栽植密度、播種量</p> <p>麦では、今後出荷に向けた調製が重要になる。調製に当たっては、実需者から望まれている高品質麦を供給するという点に留意し、雑草種子や異物(プラスチック、金属、ガラス等)の除去、荷口ごとの品質の均一化及び細粒の混入防止を図るため、グレーダー、色彩選別機、揺動型選別機等を用いて調製する。赤かび粒やカラスノエンドウの種子については、徹底的な選別で混入させないようにする。なお、グレーダーの篩目はヒノデハダカは2mm、イチバンボシ、マンネンボシは2.2mm、小麦のチクゴイズミは2.3mm以上を基準とする。</p>  <p>写真1 カラスノエンドウ混入麦</p>
<p>(2) 普通期水稻の田植え</p>	<p>6月は普通期水稻の移植時期にあたる。</p> <p>県と米麦振興協会では、近年の夏期の高温化による県産米の品質低下を軽減することと、植付苗箱数低減による低コスト化を目的に、1株3～4本で、坪当たり45～50株植えの疎植栽培を推進している。この栽植密度あれば、適切な穂数が確保でき、収量を減らすことなく登熟期の高温による品質低下を軽減できる。また、既に普及している田植機でもレバーやギヤにより簡単に調整可能で、10a当たりの必要苗箱数は従来の20～18枚から15～12枚程度に減らすことができる。</p>

項 目	作 業 内 容
(3) 早期水稲の管理	<p>また、夏期の高温による品質低下を防ぐために疎植栽培に努めるとともに、特に次の点に注意して栽培管理する。</p> <p>ア) 代かきは極力浅水で行うとともに、自然減水の後に田植え作業を行い濁水や肥料分を含む水を排出しないようにする。</p> <p>イ) 過繁茂を防ぎ、登熟が高温期に重ならないようにするため、6月10日以降(適期6月15~25日)に移植する。</p> <p>ウ) 登熟を高め、いもち病等に対する耐病性や耐倒伏性を高めるとともに、土壌pHを矯正する目的で、耕起代かきまでにケイ酸質資材を投入する。</p> <p>エ) いもち病の常発地や弱い品種(ヒノヒカリ等)では、育苗箱施用剤に本病に効果のある薬剤を必ず用いる。</p> <p>オ) 除草剤は散布時期・量や方法等、適正に使用し、処理後7日間は完全に止水し、そのうち4~5日間は3~4cmに湛水して田面を露出させないとともに、除草剤を含む水が環境に排出しないようにする。</p> <p>カ) 田植え後の置き苗はいもち病の発生源となり、それを断つことで本田発生を大幅に抑えることができるので、地域全体で早急に処分する。</p> <p>早期水稲では気温は平年より低く推移しており、生育はやや遅れている。6月は梅雨期に入り、雨や曇天の日が多くなるため、いもち病の発生や生育不良等が懸念されるので次の点に注意して管理する。</p> <p>ア 山間、中山間部での水管理 山間部等の棚田で、冷水が入り生育の遅れている水田では、掛け流し灌水をせずに、常時湛水による保温で茎数確保を図り、中干しは例年よりもやや遅らせて、さらに最少に止める等して穂数の確保に努める。</p> <p>イ 溝切り 中干しや間断灌水等の水稲生育中期以降の水管理を容易にし、透水性の改善により根の活力を高める目的で、中干しに入る前に5~6条ごとに専用機による溝切りを行う。</p> <p>ウ 中干し コシヒカリ等の早期水稲では目標とする穂数の約70~80%の茎数が確保できたら中干しに入る。中干しの程度は水稲の生育状況や土壌条</p>

項 目	作 業 内 容																				
(4)大豆の播種	<p>で加減するが、この時期は降雨が多く土壌が乾きにくいいため、やや強めの中干しとし15～20日程度行う。しかし、梅雨の合間の晴天は日差しが強いので過乾燥に注意し、田面が白く乾かないうちに走り水程度の灌水を行う。</p> <p>ウ いもち病の防除</p> <p>早期水稻のコシヒカリはいもち病に弱い品種であり、梅雨による天候不良と、いもち病の発病好適温度及びイネ自体のいもち病感受性が高まる時期が重なる分げつ盛期～最高分げつ期頃に葉いもちが発生しやすくなる。いもち病に有効な箱施用剤を使用している場合は、初期発病はほぼ抑えられるが、葉いもちの病斑を確認した場合には直ちにフェリムゾン・フサライド剤等の治療効果の高い剤で防除し、箱施用剤を施用してない場合はピロキロンやI B P 剤等の予防効果の高い粒剤を散布する。</p> <p>ア 播種適期</p> <p>大豆の播種適期は、平坦地ではタマホマレが6月上旬～7月上旬フクユタカが6月下旬～7月中旬で、中山間・高冷地ではこれより10日ほど早くなる。</p> <p>表1 品種別播種適期</p> <table border="1" data-bbox="454 1272 1444 1724"> <thead> <tr> <th>品 種</th> <th>平 坦 地</th> <th>山 間 地</th> <th>備 考</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>タマホマレ</td> <td>6月上旬～7月上旬</td> <td>5月下旬～6月下旬</td> <td>この範囲なら、早播きするほど生育旺盛で着莢数が増加し多収となる。</td> </tr> <tr> <td>フクユタカ</td> <td>6月下旬～7月中旬</td> <td>6月上旬～7月上旬</td> <td>早播きすると茎が長くなり倒伏しやすくなる。晩播適応性は大きい。</td> </tr> <tr> <td>丹波黒直播栽培</td> <td>6月下旬～7月上旬</td> <td>6月中旬～6月下旬</td> <td>直播栽培の場合6月中旬頃までは蔓化が起こり、遅すぎると減収する。</td> </tr> <tr> <td>丹波黒移植栽培</td> <td>播種6月中旬 移植6月下旬</td> <td>播種6月上旬 移植6月中旬</td> <td>移植栽培では百粒重を大きくすること及び鳥害を防止できる。</td> </tr> </tbody> </table> <p>イ 湿害対策</p> <p>大豆の播種直後～生育初期の湿害は、出芽率の低下による苗立数の不足と生育停滞を招くだけでなく、いつまでも生育回復できないため、雑草が繁茂して栽培を断念することになる。また、播種適期が梅雨期に当たり、今年は降水量が多いとの予報であるため、湿害を受けやすい転作大豆では排水対策を徹底する必要がある。</p>	品 種	平 坦 地	山 間 地	備 考	タマホマレ	6月上旬～7月上旬	5月下旬～6月下旬	この範囲なら、早播きするほど生育旺盛で着莢数が増加し多収となる。	フクユタカ	6月下旬～7月中旬	6月上旬～7月上旬	早播きすると茎が長くなり倒伏しやすくなる。晩播適応性は大きい。	丹波黒直播栽培	6月下旬～7月上旬	6月中旬～6月下旬	直播栽培の場合6月中旬頃までは蔓化が起こり、遅すぎると減収する。	丹波黒移植栽培	播種6月中旬 移植6月下旬	播種6月上旬 移植6月中旬	移植栽培では百粒重を大きくすること及び鳥害を防止できる。
品 種	平 坦 地	山 間 地	備 考																		
タマホマレ	6月上旬～7月上旬	5月下旬～6月下旬	この範囲なら、早播きするほど生育旺盛で着莢数が増加し多収となる。																		
フクユタカ	6月下旬～7月中旬	6月上旬～7月上旬	早播きすると茎が長くなり倒伏しやすくなる。晩播適応性は大きい。																		
丹波黒直播栽培	6月下旬～7月上旬	6月中旬～6月下旬	直播栽培の場合6月中旬頃までは蔓化が起こり、遅すぎると減収する。																		
丹波黒移植栽培	播種6月中旬 移植6月下旬	播種6月上旬 移植6月中旬	移植栽培では百粒重を大きくすること及び鳥害を防止できる。																		

項 目	作 業 内 容
	<p>ア) 播種までに本暗渠や弾丸暗渠を施工するとともに、圃場内の畔際に周囲溝（額縁明渠）を設ける。</p> <p>イ) 平畝栽培でスタートする場合は、耕耘後整地前に深さ20～30cmの溝を4～6m間隔で設置する。地下水位の高い地域では、高畝栽培とする。</p> <p>ウ) 週間天気予報等を参考にして播種を行い、梅雨の大雨が予想される場合は播種を延期する。</p> <p>エ) 低水分種子（軽く噛むと割れる水分10%以下の種子）は湿害に弱く、播種後の雨で出芽率が低下したり初期生育が劣るため、濡れタオルや紙おむつに包んで加湿（軽く噛んで歯形が付く程度で、水分15%前後）してから播種する。</p> <p>オ) 隣接水田からの浸透水を防ぐため、大豆栽培では集団栽培する。</p> <p>カ) 播種後に大雨があり発芽不良や生育不良が生じた場合（子葉が落葉するまでに黄変する）は、後々まで生育が悪く、茎葉の繁茂による抑草効果が働かないため、雑草が繁茂して品質収量が大幅に低下するので、すき込んで播き直したが方がよい。</p> <p>キ) 不耕起（密植）栽培は湿害軽減効果が高い。</p> <p>ウ 種子更新、種子消毒</p> <p>種子は品種固有の特性を備え、粒形が斉一で充実が良く、病害虫の被害が少ない良好なものを選定する。</p> <p>長年自家採種を続けると品種の劣化や種子伝染性病害が発生し、収量・品質が低下するので、少なくとも3年に1回は指定採種圃産の優良種子に更新するとともに、紫斑病等の予防のため、種子消毒を必ず行う。なお、鳥害防止を兼ねる場合はキヒゲン剤を粉衣処理する。</p> <p>エ 栽植密度及び播種量</p> <p>平坦部における10a当たりの栽植密度は、タマホマレでは6月上旬で10,000本、6月下旬で16,000本と、遅くなるほど多くする。フクユタカは適期播種では10,000～14,000本とするが、栽植密度差による収量差はタマホマレより小さい。丹波黒では1,600～2,800本とする。</p>

項 目	作 業 内 容					
	表2 品種別栽植密度と播種量					
品 種	畦 幅 (cm)	株 間 (cm)	㎡当た り株数 (株)	株 播 種 数 (粒)	種子量 (kg/10a)	備 考
タマホマレ	7 5	1 6 ~ 2 6	8 ~ 5	2 ~ 3	6 ~ 8	1 株 2 本仕立て とする。 播種期が10日遅 れで10%、20日 遅れで30%播種 密度を増やす。
フクユタカ	7 5	1 9 ~ 2 6	7 ~ 5	2 ~ 3	6 ~ 8	
丹 波 黒	1 2 0 ~ 1 4 0	3 0 ~ 4 5	2 . 8 ~ 1 . 6	2	3 ~ 4 移植は 2 ~ 3	初生葉展開時の 間引きで1本仕 立てにする。

(作成 農林水産研究所農業研究部)